様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月１９日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００８～２０１０
課題番号：２０５２０２７４
研究課題名（和文）　ポール・ヴァレリー詩学の生成論的研究

研究課題名（英文）　Studies on the manuscripts concerning the Poetic of Paul VALERY

研究代表者　今井　勉（IMAI TSUTOMU）
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：４０２９２１８０

研究成果の概要（和文）：フランス国立図書館西洋手稿部所蔵のポール・ヴァレリー「詩学講義」草稿資料（1933 年から 1937 年の準備草稿一巻 NAF19086 および 1937 年から 1944 年の講義草稿資料全十八巻 NAF19087-19104 の合計十九巻）の全体に眼を通し、一部資料の完全筆写を行った。また、詩学一般の問題をめぐって、コレージュ・ド・フランス教授のアントワーヌ・コンパニョン氏、パリ第四大学教授のミシェル・ミュラ氏の講演会を開催し、有益な知見を得た。

研究成果の概要（英文）：We completed a total observation of all the manuscripts concerning the “course of Poetic” of Paul VALERY, conserved in the Department of Occidental Manuscripts of National Library of France. On the basis of this preparation, we transcribed some important parts of the manuscripts. We organized two conferences, one on the situation of contemporary poetic by Professor A. Compagnon and the other on the modern poetic by Professor M. Murat, which contributed to enrich our perspective on the general poetic of literary texts.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２００９年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：フランス文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：フランス文学、ヴァレリー、詩学、生成研究

１．研究開始当初の背景

2004 年のウィリアム・マルクスの編著（William Marx dir., *Les arrière-gardes au XXe siècle: L'autre face de la modernité esthétique,* PUF, 2004）と 2005 年のアントワーヌ・コンパニョンの著作（Antoine Compagnon, *Les Antimodernes : de Joseph de Maistre à Roland Barthes,* Gallimard, 2005）によって、近代文学における「後衛」にスポットが当てられ、その対概念である「前衛」とあわせて、近代フランス文学史を読みかえる新たなパースペクティヴが提示されたことは近年のフランス文学研究界における新鮮な出来事であった。こうした「前衛と後衛」というトピックのなかでも、詩人・思想家ポール・ヴァレリー（1871－1945）は特権的な位置を占めている。パリ第 4 大学教授のミシェル・ジャルティは 2005 年の東

京大学での講演「前衛と後衛の間のヴァレリー」（2010 年刊行の論集に今井による翻訳で収載）で、特に戦間期のヴァレリー受容における『若きパルク』の後衛性と「詩学講義」の前衛性との興味深い共存を指摘したうえで、『若きパルク』にはその古典的な韻文形式に盛られたきわめて現代的なイマージュがあり、前衛的詩論の中には音楽性の重視という古典的な美学が根強く残っているといった前衛と後衛の相互乗り入れ状況を示し、両者の「間」を往還するヴァレリーの両義的な位置を見事に語っている。こうした近年の研究動向の中で、前衛でもあり後衛でもあるヴァレリー詩学を特にその「詩学講義」草稿資料にまで遡って生成論的な再検討を行うことは、発表テクストと手稿の間のダイナミズムを長く研究対象としてきた今井にとってきわめて魅力的な課題である。ヴァレリーのデビュー作『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』（1895 年）に関する生成論的研究によって博士号（1997 年東京大学）を取得した今井は、その後、ヴァレリーの審美的言説の最高峰とされる『註と余談』（1919 年）の生成研究を行う傍ら、恒川邦夫氏、塚本昌則氏との共同による草稿研究「ド・ロヴィラ夫人関連資料の解読と翻訳」を完了する一方で、両次世界大戦を経験するヴァレリーの文明論テクスト（『精神の危機』『精神の政治学』等）の草稿研究も行った。ヴァレリー詩学の生成論的研究は、審美的言説研究と歴史的言説研究の総合を含む点において、研究代表者による生成論的ヴァレリー研究の延長線上に企図されるものである。

２．研究の目的

本研究は、ポール･ヴァレリーの詩学について、主としてフランス国立図書館所蔵の草稿および関係資料を調査・分析することによって、その生成の舞台裏を明らかにし、ヴァレリー詩学の文学史的な位置づけを再検討するための一次資料の収集を直接的な目的とする。具体的には、未だ十分な検討を受けていない「詩学講義」関連草稿全 19 巻の内容を分析し、前衛と後衛をめぐる現代的な問題意識からヴァレリー詩学を再評価することが最終的な研究目的である。

ヴァレリーの詩作品をめぐる研究の蓄積は膨大である。とりわけ 1960 年代以降の「カイエ」読解に基づく新たな読み直しや、1980 年代以降の草稿整理後の綿密な生成研究がもたらした貢献はきわめて大きい。たとえばフロランス・ド・リュッシーによる『魅惑』研究は、カイエと草稿に十分な目配りを利かせた見事な成果の典型であろう。しかし、個々の詩篇の草稿研究が進む一方で、ヴァレリーの詩学については、膨大な草稿資料が整理されたにもかかわらず、未だ生成論的な考察が十分になされているとは言いがたいのが現状である。たしかに、ヴァレリーの詩学については、発表された多くのテクストの中で、ポーの効果理論、ボードレールやマラルメに遡るポイエインの倫理といった基本原理が繰り返し言明されているため、その基本的な特徴については大まかな見通しがついているという了解が大方のヴァレリー研究者のうちにあるのは事実であろう。しかし、近年新たに示された前衛と後衛の文学史再構築の視点に立って、とりわけコレージュ・ド・フランス詩学講座教授時代のヴァレリー詩学の内容を網羅的に追跡する作業は、過去のポー→ボードレール→マラルメ→ヴァレリーという系譜学のみに収束されるのではない別の位置づけをもたらす可能性がある。もちろん、これまで網羅的な生成研究のなされていない「詩学講義」資料をフルに参照する作業が、ヴァレリーにおける象徴主義詩学の系譜の補強的な追認になる可能性がないわけではない。しかし、その場合でも、草稿分析の作業自体の学術的意義は既に大きいうえに、この作業を通して少なくとも、ヴァレリー詩学をより広範な見通しの中に位置づけなおすための豊かな契機が得られることは確実である。たとえば、いわゆる古典主義やロマン主義の詩学との関連に加えて、古くはアリストテレスの詩学や旧修辞学との関連から始まって、『若きパルク』制作と同時代の友人ルイスの『詩学』との関連、あるいはロシアフォルマリスムの「文学の科学」との関連を通って、後年のバルト、ボヌフォワ、ジュネット、トドロフといった人たちの詩学との関連に至るいわば「詩学史」の見通しの中に、ヴァレリー詩学を位置づけ直す契機を得ることができるはずである。フランス国立図書館所蔵の「詩学講義」関連資料に関する集中的な研究となる本研究は、ここ二十年来、完全活字版『カイエ 1894－1914』の刊行と平行して、どちらかと言えば「カイエ」の整理に忙しかったヴァレリー研究の世界に、ヴァレリー詩学をめぐる基礎的な資料情報とそれに基づく実証的な判断を提供するだけでなく、近年の文芸思潮における前衛と後衛をめぐる議論に対しても具体的なひとつの参照点を提供しうることは確実と思われる。

３．研究の方法

本研究の対象となる資料コーパスの規模を考慮し、本研究による科学研究費補助金の交付希望期間は三年間に設定された。最初の二年間は、ヴァレリーの「詩学講義」関連資料の調査（全体の目通し、部分的筆写と分析、資料に内在する問題点の明確化）、さらに、識者との情報交換や講演会の開催といった作業に、三年目は資料面での不足部分の補強

と確認作業に費やされる。全般に、自筆草稿等の第一次資料を扱う作業が中心となるため、パリのフランス国立図書館西洋手稿部（受信書簡を含めたヴァレリーの作品手稿・タイプ原稿・ノート類の大半が所蔵されている）とジャック・ドゥーセ文学文庫（ヴァレリー作品の初版・初出紙誌や手紙類が所蔵されている）への短期滞在型の出張が本研究の前提条件となる。具体的にいえば、本研究の主な研究コーパスは、フランス国立図書館に所蔵されている全部で 19 巻にのぼる資料、すなわち、「詩学講義」の下準備となる「美的発明」など 1933 年から 1937 年の草稿 1 巻（資料分類番号 NAF19086）、および、1937 年から 1944 年の「詩学講義」草稿資料全 18 巻（同 NAF19087-19104）である。この他、同時代の書簡類、プレイヤード版著作集に収録されていない「詩学講義速記録」（全 18 講義分、『イグドラシル』誌 1937 年 12 月 25 日号から 1939 年 2 月 25 日号まで全 11 回に渡って掲載）も調査対象に含まれる。なかでも、「詩学講義」関連資料の全体にまず眼を通すということが本研究の重要な基礎となるため、この作業を最初の二年間で可能な限り進める。膨大な資料をすべて筆写することは不可能なので、実際的には、特に、古典、エドガー･ポー、ボードレール、マラルメ、象徴主義、シュルレアリスムなど、いくつかの具体的な着眼項目を設定して、それらをめぐるヴァレリーのノートを整理しながら、有機的かつ総合的な考察を行うことが研究活動の基本的な方法となる。

４．研究成果

２００８（平成２０）年度は、特に資料調査に重点を置き、大学の長期休業期を利用して、研究対象コーパスの大半を占める「詩学講義」草稿資料が所蔵されているフランス国立図書館に赴くことができた。まずマイクロフィルムで各巻の全体に眼を通し、さしあたり重要と思われる部分を筆写していくという段取りで作業を行った。まず、コレージュ・ド・フランスにおけるヴァレリーの「詩学講義」関連資料全 18 巻のうち第 6 巻までのマイクロフィルムにひと通り眼を通した。次に、第 1 巻 NAF19087 に収録されている各年度のプログラムと講義要旨を完全筆写した。特筆すべき成果として、第 5 巻 NAF19091（マイクロフィルム番号 MF3366）に収録されている、ポーについての講義録の一部、レオナルド・ダ・ヴィンチについての二週連続の講義速記録、「精神の作品の生産についての教育の試み」についての講義速記録（以上の四点はいずれもほぼ完全なタイプ原稿となっている）をすべて筆写することができた。結果として、初年度に研究対象コーパスの 18 分の 6（準備巻を含めると 19 分の 7）まで、調査を進めることができた。

２００９（平成２１）年度もまた、前年度に引き続き、大学の長期休業期を利用して、フランス国立図書館に赴くことができた。結果として、「詩学講義」草稿資料全 18 巻のうち、前年度に未見のまま残されていた第 7 巻以降を、ひととおり第 18 巻まで眼を通し、各巻の内容の概要をメモする作業を終えることができた。比較的早く全体を見通すことができたのは、マイクロフィルム調査の結果、ヴァレリーの「詩学講義」関連資料の本体部分は第 9 巻までであって、この巻以降の合計九巻分は、それぞれ量も少なく、本体のいわば補足資料体であるということに気がついたからである。第二年度を終えた段階で、研究対象コーパスの全体を概観することができたのは、三年計画の研究の進捗状況としてはきわめて順調な成果であった。

以上の資料調査とは別に、２００９年４月には、世界的に著名な仏文学者でコレージュ・ド・フランス教授のアントワーヌ・コンパニョン氏を東北大学にお招きし、現代フランス文学における写真の詩学をめぐって講演をいただくことができた。この折の講演会の報告は文芸雑誌『水声通信』に今井の翻訳で掲載された。また、本研究による直接的な招聘ではないが、２０１０年３月に世界的に著名な詩人で哲学者のパリ第八大学名誉教授ミシェル・ドゥギー氏の自作朗読講演会の通訳司会を今井が担当し、その紹介記事を同じく『水声通信』に掲載することができた点も、テーマ的には本研究の副産物のひとつであったといえる。こうしたイベント開催と一般誌への報告も、本年度の大きな研究成果のひとつであった。

研究最終年度に当たる２０１０（平成２２）年度は、前年度までの成果を整理するとともに、資料の補強と確認の作業を完全実行することに重点を置いた。引き続き、大学の長期休業期を利用して、フランス国立図書館に赴くことができた。また、２０１０年１０月には、世界的に著名なランボー研究者でパリ第四大学教授のミシェル・ミュラ氏を東北大学にお招きし、主にランボーの作品を例として、近代フランス文学における詩学をめぐって講演をいただくことができた。さらに、渡仏調査の折、ヴァレリーおよび象徴主義詩人における詩学の問題をめぐって、パリ第四大学教授のミシェル・ジャルティ氏とミシェル・ミュラ氏から、詳しい見解を直接うかがう機会を持ち、きわめて示唆に富む有益な知見を得ることができた。

以上、本研究の成果をまとめると、第一年度に「詩学講義」草稿資料全 18 巻の第 8 巻までを、第二年度に第 7 巻以降第 18 巻までをサーベイし、最終年度は全体の確認と、興味深いと判断される資料の完全筆写、そして、

補足資料のサーベイと一部筆写を実現することができた。資料調査と並行して、世界的に著名な仏文学者を複数、東北大学に招聘して講演会を開催し、第一級の知見に触れる機会を設けることができた。三年計画の本研究は、資料収集とイベント開催の両面で、きわめて順調に推移したということができる。今後は、本研究で収集した一次資料を十分に活用しながら、ヴァレリーの詩、エッセー、カイエをめぐって、また、ヴァレリーをとりまくさまざまな思想潮流、文学史的なパースペクティヴに十分な注意を払いながら、さらに発展的なかたちで、考察を進めていく所存である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計５件）
①〔共著〕今井 勉、「『海辺の墓地』の死生観」、正村俊之編『生と死への問い』、人文社会科学講演シリーズ V、東北大学出版会、139-176 頁、2011 年 1 月
②〔翻訳〕今井 勉、ミシェル・ジャルティ「前衛と後衛のあいだのヴァレリー」、塚本昌則・鈴木雅雄編『〈前衛〉とは何か？〈後衛〉とは何か？文学史の虚構と近代性の時間』、平凡社、72-93 頁、2010 年 4 月
③〔翻訳〕今井 勉、アントワーヌ・コンパニョン『第二の手、または引用の作業』、水声社、576 頁、2010 年 3 月
④〔翻訳〕今井 勉、アントワーヌ・コンパニョン「今日の写真小説」、『水声通信』第 31 号、水声社、35-54 頁、2009 年 9 月
⑤〔共著〕Tsutomu IMAI, « Au-delà de l'eurocentrisme – Valéry est-il possible dans le contexte post- colonial ? – » in *Paul Valéry « Regards » sur l'histoire,* Études réunies par Robert Picke- ring, Presses Univer- sitaires Blaise-Pascal, Clermont-Ferrand, pp. 211-220. 2008 年 7 月

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://www.sal.tohoku.ac.jp/~tsutomu/index.html

６．研究組織
(1)研究代表者
今井　勉（IMAI TSUTOMU）
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：４０２９２１８０

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：